

法華經の六萬九千二八四に就て

柳 井 慈 要

佛教經典中に於て「法華經」ほど重要な經典は恐らく外には無いであらう。凡そ佛教中で「法華經」を正所依とし之に依つて宗旨を立て、居るものは天台宗と日蓮宗である。しかし佛教各宗の中で現在「法華經」を讀誦してゐる宗旨は禪宗と融通念佛であるが佛教十三宗五十六派中「法華經」の影響を蒙らぬ宗旨は殆んどない。而して佛教を研究せんとする者一として「法華經」に觸れずしては理解せられるものは無い。佛教の哲理は悉く「法華經」に其の源泉を有してゐる。又日本文學史上に於て之を見るも「法華經」ほど日本文學に大なる影響を與へた經典は他には一つも無い。蘭菊其の美を競ふ平安朝の文學も若し「法華經」を知らずんば其の大半の眞意を没却するであらう。

夫れ聖徳法皇子御贊には「夫妙法蓮華經とは蓋し是惣じて萬善を取りて合して一因となるの豊田乃至若し釋迦如来以上に應現の大意を論ずれば特に宜しく此の經教を演へて同歸の妙因を修し莫二の大果を得せしめんと欲す」と述べられ、日蓮聖人は「夫法華經と申すは八萬法藏の肝心十二部經の骨髓也」と述べられ、又道元禪師は「法華經は諸佛如来一大事因縁也」と、存覺聖人は「ただ法華經を受持讀誦して成佛せんことはいかなる下根の機なりともなほさらん經文のごときは於我滅度後應受持此經是人於佛道決定無有疑ともいひ、あるひは若有聞法者無一不成佛云」と蓋し「法華經」を佛教經典中の最高位に位せしむる事は何人と雖も異存なき事であらう。

而して「法華經」の文字の數を檢するに先立ちて「法華經」の成立に就て大畧述べて置く必要があると思ふ。此の「法華經」を翻譯して支那に傳へた人は經典翻譯の秦斗鳩摩羅什三藏である、其の翻譯は弘始八年即ち東晋の安帝義熙

二年に當り、日本の人皇第十八代反正天皇即位元年で皇紀一千六十六年、西紀四百六年に當る。然し「法華經」の支那に傳譯されたのは羅什の譯が最初ではない。羅什より相隔つる事約百四十年即ち西紀二百六十五年西曆太始元年に竺法護なるもの「薩云芬陀利經」六卷を、西紀二百八十六年西曆太康七年「正法華經」十卷を譯し世に出されてゐる。羅什以後隋の世に闍那崛多、達摩笈多の共譯になる「添品法華經」七卷が西紀六百一年に出てゐる、が「法華經」の漢譯の嚆矢は三國時代に吳の支謙居士が孫權の黃武二年から孫亮の建興二年までの間（西紀二二三—二五三）に「譬喻品」の別譯「佛以三車喚經」一卷の翻譯にして、爾來數回の部分譯と六回の全譯とが行はれ而して其の六譯中、三譯のみが現存するから古來「法華經の六譯三存」の語がある。六譯とは即ち

法花經三昧經	六卷正無畏譯	西紀 二五五	薩云芬陀利經六卷	竺法護譯	同 二六五
正法華經十卷	同	二八六	方等法華經五卷	支道根譯	同 三三五
妙法蓮華經七卷	羅什譯	同 四〇六	添品法華經七卷	闍那崛多 達摩笈多共譯	同 六〇一

右の中「正法華」と「妙法華」と「添品」の三譯が現存してゐるのである、がしかし右の如く現存の三譯の名稱が異ると雖も「法華經」の原名に三種の別名あるには非ずして同じく「薩摩芬陀利迦蘇多覽」である、蓋し「薩」に種々の意味ありて法護は之を「正」の意味に、羅什は「妙」の意味に取つたのである。又「添品」とは更に、初め羅什譯の「藥草喻品」の半と「法師品」の初めと「提婆品」と及び「普門品」の偈頌とを缺いてゐたのを堀多等が將來せる具葉本に依つて添補せしものなりと云ふ。

現存三譯の中、支那、日本等に於て専ら信行研究せられたるものは羅什譯の「妙法華」にして「正法華」「添品法華」等は「妙法華」の比較研究の資料として用ひられるの立場に置かれてゐたのである、これ蓋し羅什の翻譯家としての譯經能力が諸家に卓絶し加ふるに流麗なる達意譯体を用ひたからであると共に二千有余名の碩學の士が翻譯を助け、僧寂等羅什門下の諸哲が競つて之を講讀し續いて光宅、天台・嘉祥等が盛んに註釋し流布せしめたるが爲めなのである。

「法華經」現存三本の品數を見るに「正法華」と「添品法華」は共に二十七品であり「妙法華」は二十八品である。而かし「妙法華」が獨立の一品としてゐる「提婆品」が他の二譯に於ては「見寶塔品」（正法華は七寶塔品）の後半となつて居て別品となつてゐないで實際は「寶塔品」の中に分けずに説かれてゐるものとなし、又「添品」の云ふ如く初め羅什譯が提婆品を缺いてゐたと爲すならば什譯も亦二十七品であつた事となるが黃檗版に依る「正法華」が「梵志品」として「提婆品」を別品としてゐるに依れば「正法華」も亦二十八品となるわけである、併し羅什譯が「提婆品」を缺いてゐたか否かに就て開元錄は法藏が干闥より得て將來せる梵本を蕭齊の武帝の時代に法意と共譯せりと云ひ嘉祥大師も亦上定村寺の法藏が干闥より梵本を得て來り永明八年十二月に瓦官寺の法意と譯し訖りたるも未だ天下に行はれず梁末に眞諦が重ねて此品を譯して「寶塔品」の後に置いたと云ふ、天台大師は羅什譯の「提婆品」が存在することを力説し「妙法華」は初めから二十八品なりと主張し本迹の分類を立てゝゐるのである。又妙經科註の云へる如く若し什門の僧寂の説に「九轍」及び「二十八品の生起」なるものがあつたとすれば羅什譯の「提婆品」があつた事を肯定せねばならぬ事となるであらう。が羅什譯の他の二十七品と「提婆品」との譯例を二、三比較して見ると、序品に於ける「娑伽羅龍王」が提婆品では「娑竭羅龍王」となつて、即ち「伽」が「竭」となり、神力品等に於ける「六種震動」が提婆品には「六反震動」となつて「種」が「反」となつてゐる、之を見るに同一人の手に依つてなる譯本に此の譯例の相異を見出す事は注意す可き事ではあるまいか、

而して古來佛教經典の最高峰たる「法華經」に就て「稽首妙法蓮華經、薩達磨芬陀利伽、一帙八軸四七品、六萬九千三八四」の語あり、しかも此の語は現今に於ても殆んど絶對的のものなりとして一般に信じられ且つ用ひられてゐるだが果して法華一部八卷二十八品に六萬九千三八四の文ありや否や。之が検討必ずしも愚人の徒事とのみは云へまい。現在三譯中羅什譯の「妙法華」に二十八品ありとし、「添品並に」正法華は共に二十七品なりとすれば、「一帙八軸四七品」の語は、一部七卷二十七品の添品並に正法華を指すに非らずして正しく一部八卷二十八品の羅什譯の妙法華を指すは明であり、「稽首妙法蓮華經」の語も亦、例へ「添品法華」が各品の品名を全然「妙法華經」の名を採用せりと云へ此の語は「添品法華」を指すに非らずして「妙法華」を指すは間違ひない事である。故に「六萬九千三八四」は明かに一部八卷二十八品の「妙法華」の文字を表すものであると云はねばならぬ。

依つて今當家に於て現に信仰せる「妙法蓮華經」に就て見たる數と法華經大意に出せる所の數とを比較對照すると右の如くである。

品名	妙法蓮華經	法華經大意
序品	四、一七二	四、一七二
方便品	品名數 九	四、九一、九
譬喻品	同 一〇	四、七一、六
	六、五九四	六、五九一
	一〇	

信解品	同 三、二六九	三、二六九
藥草喻品	同 一〇	一、六五九
授記品	同 一一	一、七二〇
化城喻品	同 一〇	五、九〇七
五百弟子記品	同 一一	五、九〇七
學無學記品	同 一四	二、三〇七
法師品	同 一三	一、二三七
見寶塔品	同 一〇	二、一六七
提婆達多品	同 一一	二、六三三
	一、七四〇	一、七二九

法華經の六萬九千三八四に就て

勸持	同	一三	一、一九五	一、一九四
安樂行	同	一一	三、二二五	三、二二五
從地涌出	同	一二	二、七七九	二、七五七
如來壽量	同	一三	二、〇一九	二、〇一八
分別功德	同	一三	二、六六五	二、六六一
隨喜功德	同	一三	一、三〇六	一、三〇六
法師功德	同	一三	三、〇六四	三、〇五九
常不輕菩薩	同	一四	一、四九九	一、四九五

如來神力	品	同	一、二二四	一、二二四
囑累	品	同	一四	四六三
藥王菩薩	品	同	二、七八九	二、七八六
妙音菩薩	品	同	一六	二、〇六九
觀世音菩薩	品	同	二、〇七〇	二、〇八〇
普門	品	同	一四	二、〇八〇
陀羅尼	品	同	一七	一、二二七
妙莊嚴王	品	同	一、二二七	一、二二七
本莊嚴事	品	同	一三	一、七二四
普嚴菩薩	品	同	一、七一五	一、七一四
勸發	品	同	一六	一、六八一
同	品	同	一六	一、六八一

となつてゐる、而してこれを各々に合計すると左記の通りになる。即ち
 法華經の六萬九千三八四に就て

妙法蓮華經は

經文數	六九三〇〇
品名數	三五三

法華經大意は

六八、九五—

従つて此を古來の六萬九千三八四と對照すれば當家現行の法華經の數は、古來の所謂「六萬九千三八四」より「八四」の不足を來してゐる。然し、若し算數をなす場合、單に經の文々のみとせず品の名をも加算するものとすれば、品の名の數「三五三」を加へて「六萬九千六五三」となりて、古來の數よりも「二八九」の超數となつて來る。又法華經大意の數は古來の數よりも「四三三」の多數の不足を生じてゐる、然し此の數が如何なる方法に依つて算出されたものか知るに由なく、又經文のみか、品の名をも加算したる數か不明であるが、今予の調べたる數と一、二、三の例外はあるが殆んど相似なる点より推察するに或は經の文？のみならんか。

次に、法華經大意の出す所の各品の數と今の妙經の各品の數と比較對照するに、方便品に於て「二〇三」、授記品は「九九」、提婆品は「一一」、涌出品は「二二」、神力品は「一〇」、勸持品は「一七」の不足を法華經大意に見、普門品は「一八」ほど法華經大意の方が多く、其他は極く僅少の過不足を見るのみにて二者共に殆んど同數である。

而して茲に於て問題となる事は「算數上の方法」と云ふ事である。即ち「一帙八軸四七品」で、一帙八軸は法華經一部の卷數を示すものであるから問題はない、「四七品」が即ち六萬九千三八四であるから「四七品」が問題となる。即ち二十八品の文々が六萬九千三八四となるのである事は勿論だが、然し其の數は二十八品の「二十八」の品の名をも加算するものか、又は「二十八品」の經の文々のみの數を云ふものか故に二十八品の名を加算すると否とは明かに「三五

三」の數の上の差を生じて來ることになる。

今假りに二十八の品の名の數(一例妙法蓮華經序品第二)を加算せず唯だ經の文のみとなして見る時、今予の當家所依の法華經に就て調べたる數は前に擧げたるが如く「六萬九千三〇〇」となつて、古來の「六萬九千三八四」と對比すれば其の差は「八四」である。然し惟ふに此數、萬が一誤算なしとせず、依つて願くば有志の者、往見されん事を希望して止まざる次第である。

又、烏地大等先生著「漢和對照妙法蓮華經」には第二十五の普門品の偈の「是故應頂禮」の次下に百四十字よりなる次の如き偈文が附加されてゐる。

慈悲救世間、常來成正覺、能滅憂畏苦、頂禮觀世音、法藏比丘尊、讚世自在王、修行幾百劫、證無上淨覺、常侍左右邊、扇涼彌陀尊、三昧示幻力、供養一切佛、西方清淨土、安養極樂國、彌陀住彼土、調御丈夫尊、彼土無女人、不見不淨法、佛子今往生、乃入蓮華藏、彼無量光佛、淨妙蓮華台、獅座放白光、如沙羅樹王、如是世界尊、三界無等倫、禮讚積功德、速爲最勝人。

又國譯大藏經卷一にも右の偈文が普門品偈の「是故應頂禮」の次下に附加されており、而して此の偈文は高楠順次郎博士將來の「法華經の梵本」にある事が注記されてある。勿論當家所依の「妙法蓮華經」には此の百四十字の偈文を見な

し。以上の如く今の當家所依の「妙法華經」に就ての數と、古來の「六萬九千三八四」の數と相違せるの故を以て直ちに「古來の數」は誤りなりとか、或は不可なりとするものではない、其の言の依つて立つや必ず依つて立つ所の根據や

あらん、又文字の算數方法上に於ても諸種の異りたる方法もあらんかと思はれる。今其の一例を示せば、「百^〇十一^〇」なる數を、漢語に於ては、「百^〇一^〇十一^〇」といふ、然るに實際の數に於ては、「百^〇十一^〇」も「百^〇一^〇十一^〇」といふも何等の相違はない共に百十一である。然し文字の上にては明かに「二^〇字^〇」の相違がある。是の如く之を實際は「百^〇十一^〇」であるから算數上「三^〇」なりとするか、又は文字數なるが故に「五^〇」なりとするかに依つて「二^〇」の異りを生ずる因となる。故に古來の「六萬九千三八四」が今の當家所依の「妙法蓮華經」に依つて()算出されたるものならんとするも如何なる方法に依るものなるやは不明である。今は「妙法蓮華經」の經文の一々の文字を數へたものである。